



異説・ 美しい国へ

12月29日

Sudden Fiction Project

高階 經啓
hirotakashina

「憎いし苦痛の反対な一んだ」

「それクイズ？ えっと、憎くないし、苦痛じゃない」

「なにそれ、バッカじゃないの？ クイズの答で、そんなのありえないでしょう」

「じゃあ、愛してるし、気持ちいい。あ、セックス」

「うわ！ もう、輪をかけてバカ。大回転バカ」

「わかんねーよ。ってかそれクイズなってんの？」

「降参？」

「ああ降参」

「正解は、美しい国でした」

「え何なに、それ全然わかんねーんだけど」

「ウツクシクニ、反対から読んでみ」

「ニクイシ、え、マジ？ ウツク、クツウ、うわすげ。何これ、これってあいつ考えたの？」

「誰よあいつって」

「あのほらいまの首相っていうか総理大臣っていうか」

「んなわけないでしょバカ」

「バカバカ言うなっつーの。お前のせいで、ほんとにバカになったらどーすんだよ」

「大丈夫だよ。もうバカだから」

「うっせーんだよブース」

というバカッパルの会話を聞きながら、わたしは電車の中で本を読んでいた。2人の会話はまもなく2人にしかわからない領域に入って行ってしまったので、わたしの関心も離れた。が、そのあともしばらく頭の中でこの会話が渦巻いていた。わたしの研究室では、長年にわたって流行語やスラングなどを分析して来た。毎年新年度版を上梓する『ニッポン現代スラング事情』は我が国でロングセラーになっている。そういうわけで仕事柄、町中でふと耳にした会話もどうしても気になってしまうのだ。

輪をかけてバカというのはなかなかうまい表現だ。しかし、そのあとの大回転バカというのはどういうことだろう。輪をかけたその輪が回転するということだろうか。それとも輪という言葉からクルクルパーのクルクルが連想されて回転という言葉が出てきたのだろうか。ああそうだ。そうに違いない！ いや待てよ。そもそもこの2人の年齢でクルクルパーという言葉は使われていたのだろうか？ いや、すでに死語だった可能性が高い。すると話はまた戻る。やはり「輪」だから回転させたのだろうか。これは研究室にいたらスタッフに意見を聞いてみよう。若いスタッフなら見当がつくかもしれない。近年の新語の出現数は尋常じゃない。

しかしそれにしても。わたしは深くため息をつく。何なのだ、この日本語の乱れようは。「チャケバFMG」が、「打ち明けた話、父親（Father）からのお金（Money）を獲得してきた（Get）」という意味だなんてどうしてわかる？ 自分の生まれた国の言葉に翻訳者が必要なんてどういう状態だ？ 「あいつもう超どN」と聞いてどんな特殊な性的嗜好の持ち主なのかと思ったら「信じられないくらいノーマル」という意味だと言う。いったいそれは異常なのか正常なのか。コメントすべき言葉が見つからない。

ただ、一方で、感心するようなものもある。「超グンジョー」が「ブルーよりも深い群青」に「超」をつけたもので、一昔前にはやった「気分はブルー」という表現をさらに深めたのだという。ある男がしゃべった後、誰も何のフォローもせず別な会話が進んだ時に「ナチュラルシカトかよ！」と男が言うのを聞いた時には不覚にも笑った。そう。新しい言葉が生まれることは全然かまわないと思う。「超グンジョー」も「ナチュラルシカト」も、その表現は創造的だとすら言えよう。

問題は、日本語を教えているわたしのような立場の人間だ。以前なら少々のズレが生じてても、それは地域差による表現の違いだとか、おじいちゃん子だから古い言い回しを知っているとかで

済んだ。いまではそういう言い訳は通用しない。わたしが子どもの頃に身につけた日本語は最早まるで通用しなくなっている。わたしが教える言葉はあまりに時代からずれてしまったのだ。

言葉というのは仲間意識をつくる上で実に効果的だが、いったんズレが生じると逆効果だ。いったん仲良くなりかけても、自分とは異なる言葉を使う人間だとわかると、それ以上全く心を開かなくなってしまうような厄介なところがある。諸刃の剣なのだ。若い日本人を我々の仲間引き込むためには、やはりある程度アップデートされた若者言葉を操れる必要がある。

若者言葉や流行語ばかりを集めた参考図書を読みながら、わたしは頭が爆発しそうになる。「サンダる」とか「ちょリッチ」とか「デコでん」とか言う言葉を受験生よろしく真剣に覚えようとしている自分が正直情けない。これが昔だったら！ マルクス主義を研究するサークルに顔を出した若者をオルグしたり、海外旅行先で出会った反体制思想（思想などと呼べる代物ではなかったが）を抱く若者を再教育したり。あの頃のわたしは今で言う所のカリスマ的とさえ言える力を発揮し、10人と話せば9人は本国に送り込むことができた。輝かしい日々。いや、待て。今ではもう、「カリスマ」なんて死語なのかもしれないが。

現在のわたしと来たら打つ手がない。わたしの日本語研究室を出た生徒は日本に来ると浮きまくり（あるいはドンビキされ、フルシカトされ）、使命を果たせないまま本国に逃げ帰り、敗残者として余生を送ることになる。本国に帰っても人生が終わってしまうだけだということに気づき、任務を放棄して日本に亡命する者も出てくる。そしてそのすべてがわたしの落ち度になる。それと言うのも日本語が通用しないがためなのだ！ 生まれ育った国の言葉が通じないなんて！ するとまたさっきの2人の会話が耳に入る。

「飲みホ？」

「飲みホ。それがさ調子乗り子でリバーズにつぐリバーズ」

「恥っずいなあ。マーライオンかよ」

「だからもうペコキュー症候群」

「うわマジ？ どんだけ生命力あんの」

ここはもう日本ではない。わたしの知る国では最早ない。本から目を上げバカップルを見て目を疑う。それは恐らく40代くらいの会社員の男女だったのだ。女の方が怪訝そうな表情でわたしの方を見る。あわてて目をそらすと、その視線の先の中吊り広告に、さきほどクイズのネタになっていた言葉が踊っている。週刊誌の見出しでいいようにネタにされ、叩かれているのだ。美しい国。いい言葉ではないか。そうだ。あの男の美しい国の政策が成果を上げれば、あるいは美しい日本語がまた戻ってくるかもしれない。そうすれば、ああ、そうすればわたしにもまたあの輝かしい日々が戻ってくることだろう。そしてたくさんの若者を感服させ、偉大なる体制、偉大なる指導者の元に向かわせることができるだろう。

（「美しい国」 ordered by tara-san/text by TAKASHINA, Tsunehiro a.k.a.hiro）

感謝の言葉と、お願い&お誘い

Sudden Fiction Project（以下SFP）作品を読んでいただきありがとうございます。お楽しみいただけましたでしょうか？ もしも気に入っていただけたらぜひ「コメントする」のボタンをクリックして、コメントをお寄せください。ブログへの登録（無料）が必要になりますが、この機会にぜひ。

「気に入ったけどコメントを書くのは面倒だ」と言うそのあなた。それでは、ぜひ「ツイートする（Twitter）」「いいね！（Facebook）」あたりをご利用ください。あるいは、mixi、はてな等の外部連携で「気に入ったよ！」とアピールしていただくと大変ありがたいです。盛り上がります。

※星5つで、お気に入り度を示すこともできますようですが、面と向かって星をつけるのはひょっとしたら難しいかも知れませんね。すごく気に入ったら星5つつける、くらいの感じでご利用いただければ幸いです。

現在、連日作品を発表中です。2011年7月1日から2012年6月30日までの366日（2012年はうるう年）に対して、毎日「1日1篇のSFP作品がある」という状態をめざし、全作品を無料で大公開しています。→[公開中の作品一覧](#)

SFP作品は、元作品のクレジットをきちんと表記していただければ、転載や朗読などの上演、劇団の稽古場でのテキスト、舞台化や映像化などにも自由にご活用いただけます。詳しくは「[Sudden Fiction Project Guide](#)」というガイドブックにまとめておきました。使用時には、コメント欄で結構ですので一声おかけくださいね。

ちょっと楽屋話をすると、7月1日にこのプロジェクトを開始して以来、日を追うごとにつくづく思い知らされているのですが、これ、かなり大変なんです（笑）。毎日1篇、作品に手を入れてアップして、告知して、[Facebookページ](#)などに整理して……って、始める前に予想していたよりも遥かに手間がかかるんですね。みなさんからのコメント、ツイート（RT）、「いいね！」を励みにがんばっていますので、ぜひご協力お願いいたします。

読んでくださる方が増えるというのもとても嬉しい元気の素なので、気に入った作品を人に紹介して広めていただけるのも大歓迎です。上記Facebookページも、徐々に充実させてまいりますので、興味のある方はリンク先を訪れて、ページそのものに対して「いいね！」ボタンを押してご参加ください。

10月からは「1日1篇新作発表」の荒行（笑）を開始し、55作品ばかり書き上げる予定です。「[急募！お題 この秋Sudden Fiction Project開催します](#)」のコメント欄を使って、読者のみなさんからのお題を募集中です。自分の出したお題でおはなしがひとつ生まれるのって、ぼくも体験済みですが、かなり楽しいですよ！ はじめての方も、どうぞ気軽に遠慮なくご注文ください（お題は頂戴しても、お代は頂戴しないシステムでやっています。ご安心を）。

こんな調子で、2012年6月30日まで怒濤で突き進みます。他にはあんまりない、オンラインならではの風変わりな私設イベントです。ぜひ一緒に盛り上がってまいりましょう。

異説・美しい国へ

<http://p.booklog.jp/book/41354>

著者 : hirotakashina

著者プロフィール : <http://p.booklog.jp/users/hirotakashina/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/41354>

ブックログのpapier本棚へ入れる

<http://booklog.jp/puboo/book/41354>

公開中のSudden Fiction Project作品一覧

<http://p.booklog.jp/users/hirotakashina>

電子書籍プラットフォーム : ブックログのpapier (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社 : 株式会社paperboy&co.